

「霧の中の白い犬」の概要

2017/08/11

この資料の内容について(目次)

1. どんな物語？
2. もう少し詳しい紹介
3. 知っておくと良い歴史背景
4. 登場人物
5. 物語のあらすじ (1)/(2)/(3)
6. 感想文を書くためのヒント
7. [予備] もっと細かいあらすじ (1)/(2)/(3)/(4)

1. どんな物語？

- 「ジェシー」が学校で、ナチスについて学び始めた頃、認知症となった祖母を苦しめている過去と向き合うことになる
- 「人々が創り出す悲しみ」と「寛容」を描いた物語

➔ 同じ過ちを起こさないよう、我々は次の2点を大事にするべきである

- ① どんな小さな差別や暴力も見逃さず、勇気を持ち正しい行動をとること
- ② 人を許し、人を受け入れる姿勢を持つこと

*寛容・・・他人の過去の罪をとがめたりしないこと。心が広いこと。他人の言動などを受け入れること。

2. もう少し詳しい紹介

- イギリスに住む少女「ジェシー」が主人公。小さい頃から犬が大好きだった彼女は、自分の祖母が白いシェパード「スノーウィー」を飼い始めたので大喜びするが、やがて、その祖母が認知症になってしまう。
- 認知症が進行する中、祖母は何かにおびえるようになる。ジェシーは祖母が苦しむ原因を調べて行く中で、旧ドイツ体制が招いた悲しい過去の歴史を学ぶ機会を持つとともに、祖母が加害者側のナチス団体に属していたことを知る。
また、戦争が終わった後、当時の祖母がユダヤ人の家から預かっていた白い犬「ウルフィー」を返しに行ったが、ナチスを恨むその家の女の子は「ナチスにいながら何も状態を良くしようとしなかったあなたを永遠に許さない」と言われ、非常に大きなショックを受けたことも知る。
- しかし、「ウルフィー」を受け取った女の子も成長をして行く中で「決して、あの子個人が起こした問題ではない、あの子を責めてしまった自分が間違っていた、謝りたい・・・」と感じるようになる。
- 犬を受け取った女の子は、現在はイギリスにいて、なんとジェシーの友人ベンのおばあさんだった。数十年間の時を超えて、「ウルフィー」を受け取った女の子(=ベンの祖母)は、「ウルフィー」を返してくれた女の子(=ジェシーの祖母)と再会。ついに二人は、当時の確執を完全に解消することができた。

→ 人間とは、旧ドイツが起こしたような過ちを、再び起こしてしまい兼ねない生き物だ。これを防ぐためには、どんな小さな差別や暴力も見逃さない、勇気を持って正しいと思う行動をとる、そして、人を許し受け入れることである。

3. 知っておくと良い歴史背景

- ユダヤ問題・・・宗教と文化の違いから、いろいろな国でユダヤ民族が迫害を受けていたこと(いること)

<https://matome.naver.jp/odai/2137950327511744801>

- ナチス・・・1933～1945年のドイツ政権。ヒトラーが率いる独裁国家。人種主義(反ユダヤ主義)が特徴的な政策。ゲルマン人を尊重するとともに、自由主義・社会主義・共産主義者は殺害/投獄/国外追放された。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ナチス・ドイツ>

4. 登場人物(主要)

主に現代のイギリスが舞台だが、過去を回想する場面ではドイツも登場する

おばあちゃん
エリザベス・ジョーンズ
(ドイツ名マリア・ベイヤー)
ジェシーとフランのおばあちゃん。
認知症が進みつつある
この人の過去が明らかになる場面がこの物語のクライマックス

何十年も前に
接点あり

ミリアム・マクドナルド
(ドイツ名ミリアム・レヴィ)
ベンのおばあちゃん。
幼いころドイツに住んでいたが、後にアメリカへ渡り、獣医となった。
父がユダヤ人だったため、ナチスからの迫害を受けていた。

ケイト
ジェシーの親友。
下半身が動かないが、
シットイングバレー
(Sitting Volleyball:
座ってやるバレー
ボール)で地域代表
に選ばれるなど運動
神経が良い。
正義感も強い。

親友

主人公
ジェシー・ジョーンズ
運動は得意ではない。
内気で、もじもじとした性格の女の子。
この子の語りで物語が進んで行く。

いとこ

フラン
ジェシーのいとこ。家庭の事情で、寄宿舎制の学校(高級な学校、寮生活を送る)をやめ、ジェシーの通っている学校へ転校してきた。
頭のよい子だが、不良の友達と一緒に行動している。

ベン
ジェシーの同級生。
数か月前に転校して来た男の子。
ユーモアのセンスがある。ジェシーは好意を抱いている。

祖母
孫

祖母
孫

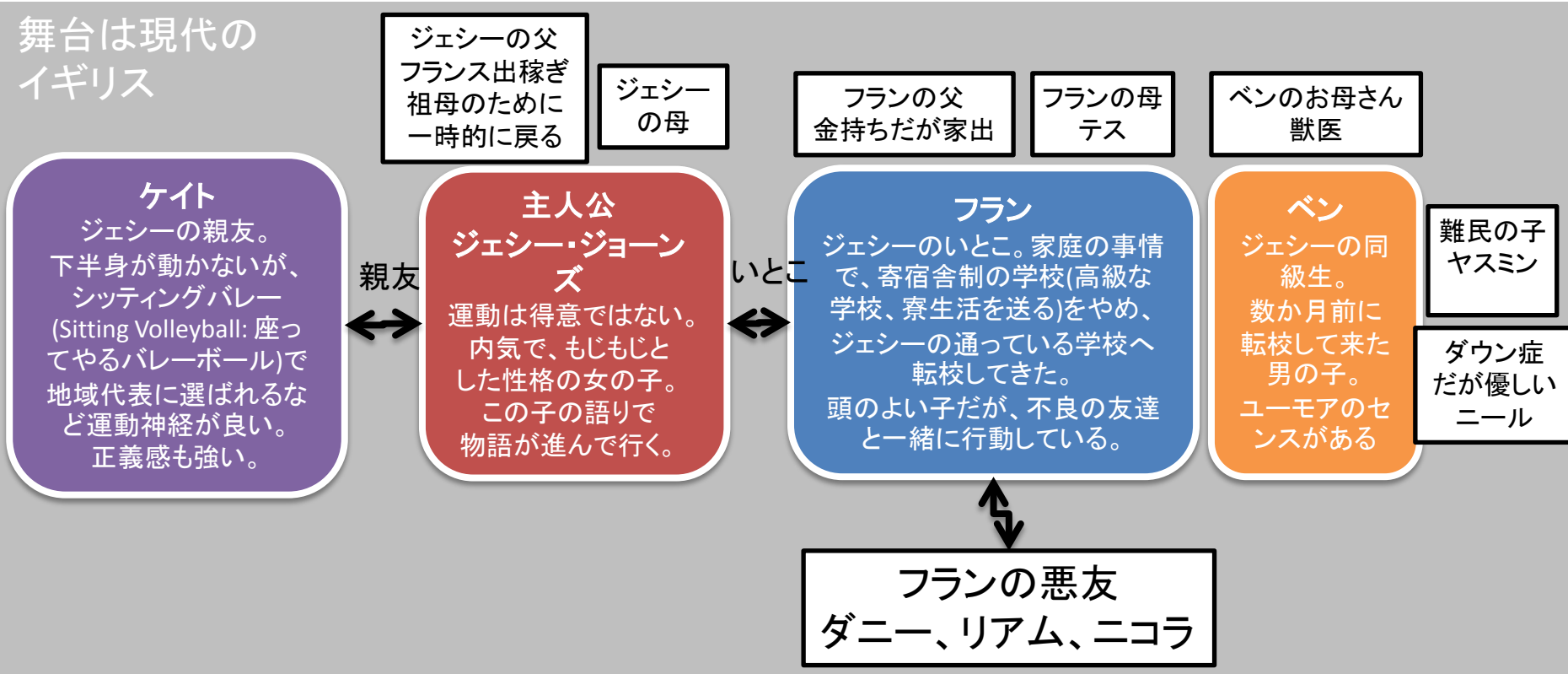
祖母
孫

祖母
孫

同級生

4. 登場人物(補足)

舞台は現代の
イギリス



5. 物語のあらすじ (1)

- イギリスに住むジェシーは、母と二人暮らし。父は、移民労働者に仕事をとられて会社が倒産したため、フランスへ出稼ぎに行かざるを得なくなっているのだ。かつて住んでいた大きな家は売り払われ、今は賃貸住宅。犬を飼いたくても飼えない環境。
- いとこのフランの父親は、恋人を作って家から出て行ってしまう。そういった影響もあり、フランは高級な寮制の学校をやめて(実際には母の「テス」がさみしくて家に呼び戻したらしい)、ジェシーの通う学校へ転校。また、素行(そこう)の悪い不良友達と付き合いだしてしまう。
- ジェシーの親友ケイトは、足が不自由で車いす生活をしている。障がい者として、周りから差別を受けているが、座ってプレイするバレーボールで選手に選ばれる運動神経の良い子。負けず嫌いで、成績もなかなか良い。
- ベンは去年転校して来た男の子、ジェシーは好意を抱いている。家は代々 獣医をしている。母も獣医で、「犬のしつけ」教室を開いている。祖母は戦争の話をしに学校へ来てくれる。

5. 物語のあらすじ (2)

- ジェシーのおばあちゃんは白いシェパード犬「スノーウィ」を飼い始めた。ジェシーは喜ぶが、おばあちゃんは認知症の症状がじょじょに進行。おかしい事を言うようになる。犬の面倒はジェシーがみることになり、ベンの母親のやっている「犬のしつけ教室」に通うようになる。
- ジェシーを取巻く環境ではいろいろな問題が起こる。いじめ、障害者への差別、また、いとこのフランの友達が起こす暴力事件。さらにフランの愛する老犬が母親に殺処分される等。ジェシーのおばあちゃんは階段から落ちて怪我、入院することになる。
- いろいろ調べて行くと、ジェシーのおばあちゃんは「ヒトラー・ユーゲント」という、ナチスドイツ青少年団の一員だったことが分かる。おばあちゃんが特別な悪者だった訳では無い。若いころは自分で善悪の判断を十分に行うことは難しいことだし、また時代の雰囲気からも、ナチスドイツの一員であることは、当時のドイツであれば普通の事ではあったのだ。

5. 物語のあらすじ (3)

- ジェシーのおばあちゃんの父は、ユダヤ人の家で飼われていた白いシェパード犬「ウルフィ」を保護していた。当時ドイツでは、ユダヤ人のペットを殺処分させていたのだが、父は世話になったあるユダヤ人のために、こっそり犬を一匹だけ隠して育てることにした。父も死ぬがこの犬を娘(=おばあちゃん)に託す。
- 戦争が終わった後、おばあちゃん(当時まだ女の子)は、その犬を本来の飼い主の家に返しに行く。そのとき犬を受け取ったのが、なんと、今はベンのおばあちゃんであるミリアムだったのだ(当然ベンのおばあちゃんもまだ女の子だった)。その時ベンのおばあちゃんミリアムは、ジェシーのおばあちゃんに対し「永遠に許さない」と言ってしまう、ジェシーのおばあちゃんはショックを受ける。しかし、ベンのおばあちゃんもずっと後になって「人は、人を許す事ではか前に進めない...本当はあの子に感謝すべきだった」と気がつき、反省することになる。
- 現在の「あの子」がジェシーのおばあちゃんなのだと知ったベンのおばあちゃんは、入院中の(ジェシーの)おばあちゃんに会いに行った。昔の対応を詫び、また「ウルフィ」を飼ってくれたことへの感謝を伝え、またナチスのような問題も繰り返さないという会話をして、抱き合って仲直りをした。

6. 感想文を書くためのヒント

- **ホロコースト(ナチスドイツによるユダヤ民族らの大量虐殺)に関連して**
ヒトラー政権が人種差別をして大勢のユダヤ人を殺してしまったこと(ペットも殺された)
「身体障がい者や老人は社会の負担になるから排除しよう」とする考え方も世の中にはある。
認知症の人や障害のある人へ社会はどうしたらいい？ 身近な人がそうなったらどうする？
- **移民問題**
別の国から貧しい人が押し寄せる、見慣れない人種に対して不気味さを感じることもある、
低賃金で仕事をする移民が増えると、もともと暮らしていた人が仕事を奪われる etc
イギリスが国民投票の結果「EUを脱退する」という宣言をしたことも記憶に新しい。
- **高齢化・認知症の問題**
日本も高齢化社会になってお年寄りの割合が多い。若年層が少ない中でどう支えて行くか
- **いじめや差別の問題、暴力の問題**
身近で起こっている問題はないか、正しく問題に関わり止めることができているか、
過ちに気付いても言えない環境が続くと、やがてナチス問題に発展しかねない危険性をどの人間も備えている → **勇気を持ってとるべき行動をとろう、受け入れ許す気持ちを持とう**

7. [予備]もっと細かいあらすじ(1)

1

ジェシーのおばあさんが白い犬スノーウィを飼いだしたので、親友で障害者の友人ケイトと見に行くも、おばあちゃんは急に痴呆症になる。

2

いとこのフランはおばあちゃんの話にもつれなく、悪い仲間とつるんでいる。第二次世界大戦の授業で高齢者の戦争体験インタビューの宿題が出る。ジェシーの家ではくおばあちゃんの過去を聞いちゃいけない>という暗黙のルールがあるので、おばあちゃんへ聞く代わりに、親友ケイト、政治難民のヤスミン、ジェシーが気に入っている転校生の男の子ベンといっしょに、介護施設インタビューすることになる。

3

フランに嫌なことを言われた事についてケイトにあれこれ質問されたことや、認知証のおばあちゃんが心配になったりして授業中に泣き出すジェシー。イケメンのハンター先生は「盗賊の花嫁」という童話について「この童話がハッピーエンドかどうか論評を書き、童話の続きを書いて来て」という宿題を出す。

4

おばあちゃんは、フランの母＝テスおばさんの家で面倒みてもらうことになったので、おばあちゃん宅の犬スノーウィの面倒身はジェシーにまかされる

5

遊びざかりのスノーウィに手を焼くジェシー。その散歩中にベンと出くわし、獣医である彼の母がやっている「犬のしつけ教室」に誘われる。

6

おばあちゃんの家で、ドイツから「マリア・ベイヤー宛」のまちがい葉書が来たので郵便局へ聞きに行く。局のデイヴィスさんは、移民が大金を国へ送金したがるのでどこで稼いだのか疑う。ミセス・アイヤー宛の間違いかもねと聞き、行って見るとダウン症だが優しいニールが庭仕事をしていた。家ではスノーウィがおばあちゃんの秘密の箱をグチャグチャにしまった。すると白いジャーマンシェパードを抱いた、痩せた女の子の写真が出てきた。ジェシーは写真を自分のポケットにしまった。

7

しつけ教室では、ベンの母があっさりスノーウィを手なづける。ベンの家は代々獣医の家系。親友ケイトは「ジェシーのおばあさんは、『飼い主が見つからない犬は保健所で射殺されるわ』と言っていた」とベンに言い付ける。また、犬のしつけ教室では、自分の飼う高級な種類の犬を他の雑種に近づけたがらない飼い主に遭遇。ベンの母は「そんな事は許せない、ベンのおばあちゃんもシェパードを繁殖させていた。」「雑種への差別は許さない」等と話す。

7. [予備]もっと細かいあらすじ(2)

8

おばあちゃんが階段から落ち緊急入院「殺されるのを待つなんて冗談じゃない」と暴れたり、おかしな事を言い出して紙にJMと3枚書いてジェシー、ケイト、フランに渡すように言ったり。特に、ケイトは車椅子から降りてソファに座っておきなさい、ボタンをもらいなさいと話す。ジェシーが「犬は無事」と伝えると一旦安心するも、すぐ目を覚まし「訓練すれば犬も人間の言葉を話す」「ハイジが訓練していた、でもハイジにはもう会いたくない」と支離滅裂なことを話す。

9

パパが出稼ぎから休みをとって帰りジェシーは喜ぶ。パパもおばあちゃんも器用で良い人だけど、移民労働者のせいで事業が破産、豪邸は売られ、パパはフランスに出稼ぎ中だったのだ。たむろする移民労働者が気に入らないとママに言ってしまったジェシーは、ママから注意はされるものの、ママも労働者をやや警戒している様子。そのとき親友ケイトから「ベンとヤスミンと4人で映画に行こう」と誘われて雑貨屋さん買い物に行くと、ニールが突き飛ばされ泣いていた。ジェシーは外国人労働者がやったのでは？と腹を立てた。

10

ところが犯人はフランの悪い友達、ダニー、リアム、ニコラだった。ジェシーは何も言えない自分を臆病者かもしれないと思う。映画は楽しかったが、帰りに送って行った政治難民のヤスミンの家が、臭くてぼろくて狭いことにショックを受けた。

11

ニールの件や、おばあちゃんのこと、スノーウィが暴れる話をすると、なぐさめてくれる親友ケイト。朝礼で、スポーツ万能のケイトがシッティングバレーで英国ジュニアチームメンバーに選ばれたと発表されたが、フランたちはバカにして笑うのでケイト激怒。フランたちへ抗議するが取り合わない。ジェシーはフォローするが「(運動神経にぶい)あなたに言われても喜べないし、無知な人間(=フラン)が認めないのが頭にくる」と言う。ジェシーはつい「車椅子だって上手」と言ってしまう、ケイトからは「好きで乗ってるわけじゃない、あなたみたいににお気楽でいたい」と言われてしまう。

12

歴史の時間に第二次世界大戦のDVDを観た後、ドイツ語の授業で先生が席をはずしている間、教室はナチスの物まね大会になったが先生は怒らないのでバツが悪い。ボンベッファー先生からは「ドイツ語の素養がある」と言われていて気まずいジェシーとベンは「もう誰もナチスのことなんて考えないと思います」というと、先生の「ナチス問題のことは誰にも忘れてほしくない、この国でだって起きる可能性はある」との発言がされる。「(ナチスを倒した)イギリスに対して失礼だろう」と感じる。放課後、ベン、ヤスミン、ケイトが家に遊びに来て2人は仲直り。4人は介護施設インタビューの話が面白かったと話す。

7. [予備]もっと細かいあらすじ(3)

13

グフタさんの店にいた時、店の窓ガラスが割られ、犯人は移民ではないかとみんな疑う。ママの車で帰る途中フランが泣きながら歩いている。聞けばフランの留守中に飼い犬を安楽死させられたとのこと。テスおばさんは、フランに怒鳴るか泣くか、愛人と出ていった父の愚痴ばかりだったので、犬だけが救いだったと泣くフラン。嫌味を言ってしまうジェシーだが、夜中も一人泣いているフランを見ると、ニールがフランの悪友に突き飛ばされた事を問いただせなくなる

14

第二次世界大戦の授業のゲストとして、ベンのおばあちゃんミリアム・マクドナルドが来た。

彼女はナチス政権中のユダヤ人で、ナチスから迫害された事や、獣医の職をうばわれた父が反抗心から白いジャーマン・シェパードのウルフィを飼っていた事を話す。また、ナチスは犬に人間の言葉を話させる大学を作る話や、肉食主義のヒトラーは、狩りが残酷なので禁止した、といった話しをする。

15

そして障害者や老人、病気の人、心身障害者、生まれつき障害児、ナチス反対派の政治家、司祭、同性愛者、共産主義者、エホバの証人信徒、ジブシー、シンティ・ロマン、ユダヤ人が強制収容所などで虐殺された話し。ナチス政権崩壊後、怨みで毎夜悪夢を見ていたが愛犬ウルフィをある女の子が返しに来てくれた。その子の父は、ユダヤ人ペットを殺処分する仕事で世話になった、ユダヤ人老教授の犬だけは隠していた。「状況が変わったら犬を返して」と父が言い残した犬がウルフィだった。ウルフィが返って来て悪夢も見なくなり、お母さんがアメリカ人と再婚渡米しおばあさんも娘(ベンのママ)も獣医になった。ウルフィを連れてきた女の子は「何も知らなかった」と泣きながら謝るが、ベンのおばあさんは「ナチス側にいながら、正しい行動をとらずに放置していたあなたを永遠に許さない」と言ってしまった。今は、「人は許す事でしか前に進めない...制度に立ち向かうのは勇気があるので、犬を隠して育ててくれた女の子に感謝すべきだった」と反省し、「小さな偏見も見逃さないこと、また、思いやりに意味がない等と決して思わないで欲しい」と語った。

16

勇気の出たジェシーは、フランと二人で話そうと呼び出し、ニールの件を問い詰めた。フランは「ニールを突き飛ばすつもりだったとは知らないし、グフタさんがタバコを売ってくれなかったからリアムが移民のせいにして石を投げた」と白状。また、ニールのことを笑ったけどママに言わないでと懇願。フランは、パパは浮気、ママは泣いてばかり、転校までさせられ何もかも嫌になってたいと話し、ジェシーやケイトみたいにダサくなりたくなかったと告白。ジェシーは怒りを感じたものの、フランの辛い気持ちもわからなくないし、知ってて黙っていた自分も非難できるほど勇敢な人間じゃないなと感じた。

7. [予備]もっと細かいあらすじ(4)

17

ジェシー、フランでニールの家へお見舞いの後、フランがジェシーの両親に白状し警察沙汰に。フランのパパも帰ってきてニールに謝罪。ジェシーは母親にはほめられたがモヤモヤがのこる。宿題のおとぎばなし「盗賊の花嫁」はぞっとする話だった。人殺しの盗賊団を告発する際、最後に、殺された女性の指を証拠に掲げる話だったからだ。フランは元の学校に転校する事になり、パパからもほめてくれたけどピンと来ない。そしてまたマリア・ベイアー宛のナゾの絵葉書が届く。ベンのおばあさんのしてくれたナチス/ユダヤの話の思い出したり、自分のおばあちゃんの病状を思ってへこみ、自分が正しい事を当たり前に行ける人間だったらいいのに、と白い犬の写真の女の子を見ながら思うジェシー。

18

翌日「盗賊の花嫁」の授業で、作者は「子供たちを救うことができる」と主張しているとの説明。ヤスミンは「人は幸せでも安全でもないから」と答える。先生はヤスミンをほめ「問題行動を起こす子の世界観を知れば理由がわかる(=世界観を知らなければ、なぜそういう行動をとろうとしているのかも分からない)、だから残酷な童謡だって非常に大事」と話す。おばあちゃんが後悔している事を探り当てようと、ベン之家に写真を持ってみんなが集まる。

19

おばあちゃんの写真は外国の風景の「マリアとトマス」やガールスカウト風の「マリアとハイジ」、「マリアとグードルン」の写真には「ダッハウ」と書かれていた。おばあちゃんからの「JM」と書かれた紙を見せ調べると、ダッハウとは軍服の裏毛に使われるアンゴラウサギを繁殖する強制収容所。グードルンとはナチス親衛隊リーダーの娘だった。ケイトが「おばあちゃんの家族はナチスだった」と気づき、理解したベンのおばあさんは「ナチス青少年団ヒトラージュエントの少女団ユングモデルのイニシャルがJMで、団所属のボタンがもらえるのだ」と話した

20

ケイトはショックを受けてヤスミンと帰る。ジェシーもショックを受けるが、ベンのおばあさんは、JMの紙は身を守るための身分証代わりで、ユージュエントも、ドイツの子はキャンプのつもりで楽しんでいただけと説く。だが、白い犬と少女の写真を見たベンのおばあさんは、あの時ウルフイを連れてきた子だと驚く。「マリア・ベイアー」とはおばあちゃんのこと、今はエリザベス・ジョーンズと名乗っていることも分かった。手紙の主はおばあちゃんのお兄さんのトマスの孫娘からで、「イギリスにいる親戚(=大叔母さんであるジェシーのおばあさん)に会いたい、現在のダッハウも見に来て欲しい」とも書かれていた。ジェシーとベンのおばあさんは、おばあちゃんの病院に行く。そして何十年前の事への感謝・詫びを伝える中で、ジェシーのおばあちゃんは「同じ事が起きるんじゃないか恐ろしい」と泣き崩れるが、ベンのおばあさんは「そんな事はさせない」と、JMと書かれた紙を破き捨て、そして二人は固く抱き合った。